

[館員随想録]

中国・敦煌周辺石窟の
西夏時代以降の水月観音図

中国の水月観音図は現存作例の多くが甘粛省敦煌周辺に集中しています。この度、八日間の日程で石窟を巡り水月観音図を見てきた報告を致します。この地へは二度目の来訪になります。

敦煌の石窟では莫高窟(千佛洞)が最も大規模で造営期間も長く続きました。しかし、莫高窟の周辺には小規模ながらもその他に幾つかの石窟と壁画が残されています。今回は敦煌地区の莫高窟、五個廟石窟、安西地区の榆林窟、東千佛洞において西夏時代(1038~1227年)の水月観音図像を中心に見てきました(図1:地図参照『中国密教』1999年、春秋社より転載)。敦煌は省都の蘭州から飛行機で約一時間半と交通の便が良くなったとはいえ、飛行場に降りたつと砂漠の真ん中で、まだまだ往年の様子を感じさせてくれます。

水月観音の図像には、時代が下ると共に観音に様々な姿勢やモチーフが付加されていきます。甘粛省北西部に点在する石窟壁画には水月観音図が多く残っており、その展開を見て行くことができます。図像内容によって五代~宋代、西夏時代と大きく区分することができ、特に西夏時代には玄奘を基にしたと考えられる僧と従者、馬を組とした「唐僧取経図」が画面内に添景として描き込まれています。

今回は西夏時代以降の写真図版が出版されていないために未見であった図像の実見と、ほとんどの石窟が壁画の撮影は禁止されているため、スケッチによる図像の把握を目的としました。

敦煌莫高窟は現存する石窟は北涼(五世紀初頭)から元代のもので、壁画の残る南区の北側には画僧や修行僧が住んだ北区が続いています。

東千佛洞は安西の街より車で約三時間。時折ラクダを遠方や近くに見ながら砂漠の中を走ります。敦煌周辺の石窟の中でも特に寂しい所で、周囲に植物はほとんど見られません。今回見せていただいた第2窟には2図(美のたよりno.144拙稿 図3、4参照)、第5窟には1図、西夏時代の水月観音像があります。第5窟の水月観音図は画面中央に正面向きの水月観音が坐し、菱形を連ねた岩が観音を包む円光の縁に沿うように囲みます。上方には月が浮かび、大変幻想的な印象を受けました。画面の下方には人物と馬らしき描写があるのですが、破損が激しくほとんど確認できないことが惜しまれます。

安西の街から車で約一時間半の距離にある榆林窟(図2)は現在も水の流れる川の両側に開かれています。周辺には莫高窟でも見られたポプラが続き、東千佛洞と比べて大変

豊かに感じられます。莫高窟の次に規模が大きく、一般の見学者に対する対応も手慣れています。第2窟の水月観音図は大画面で鮮やかに残り、図版集にも紹介されています。第29窟は石窟のもっとも奥の壁に水月観音図が2図あります。共にほぼ同様の構図であり、画面の上部に岩座上の水月観音が描かれ、下部を上下段に帯状に分割して、上段には蓮池に火炎を伴う龍を、下段の岸上に数人の人物を描いています。どちらの水月観音も傍らに牡丹の花が認められ、これはハラホト出土と同じく西夏時代の水月観音像(絹本着色 ロシア・エルミターージュ美術館蔵)との共通した要素といえます。

五個廟石窟(図3)は現在一般公開されていません。初めて行く場所なので所要時間もわからずやや不安でしたが、実際は莫高窟から車で一時間弱と近く、事前に連絡をした管理者の博物館長は大変親切な方でした。壁画の描かれた石窟は断崖の中程の高さに五窟並んで開かれています。石窟から周囲を眺めると、ここでも前方に大河が流れています。水月観音図は第1窟(元時代)と第4窟(西夏時代)の入口近くに2図ずつ描かれています。第1窟の2図(図4、5:筆者スケッチ、斜線部分は画面の損傷部)は奥行きのある空間の中央に観音が配され、その背後に火炎のように上方に伸びる奇怪な形の岩、さらにその間を竹が見え隠れしています。画面下方は観者にとって手前になり、雲に乗って観音のもとに飛来する菩薩とみられる描写があります。画面

方は遙か遠くにあたり、雲の上に小さく樓閣または九層塔が認められます。ここで注目されるのは、観音の向きです。通常、水月観音図は入口の周辺や甬道(主室と前室をつなぐ短い廊下のような部分)に左右2図が一对で配され、観音は石窟のもっとも重要な奥の方向を向いています。しかし、この第1窟では観音はどちらも左方向を向き、従って、それぞれ異なる方向を向き、片方は明らかに石窟の入口の方向、つまり奥とは逆方向へ視線を向けていることとなります。水月観音の図像は時代を追うごとに定型が薄れていきますが、石窟の中心へと導く役割を持つと考えられる水月観音にとって重要な要素である視線の方向の意味まで薄れているということなのでしょうか。今後も検討の余地はあると思われます。

今回は、以前訪れた際の知人に多く会うことができました。訪れる度に、自然の一角に残る興味深い壁画や現地の人々の親切に触れ、また来ようと強く思います。

(学芸部部員 瀧朝子)

図2 榆林窟 俯瞰



図1



図3 五個廟石窟



図4 第1窟



図5 第1窟



季刊 美のたより No.153

平成18年1月5日

発行 大和文華館